

第130回 日文研フォーラム



# 出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅

サダキチ・ハルトマン(1867—1944)と倉場富三郎(1871—1945)

Dejima—Nagasaki—Japan—The World

The Nostalgic Journeys of Sadakichi Hartmann (1867-1944) and  
Tomisaburo Kuraba (nee Thomas Albert Glover 1871-1945),

Two Men from the International Settlement



ケネス リチャード

Kenneth L. RICHARD

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄





● テーマ ●

# 出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅

サダキチ・ハルトマン(1867—1944)と倉場富三郎(1871—1945)

Dejima—Nagasaki—Japan—The World  
The Nostalgic Journeys of Sadakichi Hartmann (1867-1944) and  
Tomisaburo Kuraba (nee Thomas Albert Glover 1871-1945),  
Two Men from the International Settlement

● 発表者 ●

ケネス リチャード  
Kenneth L. RICHARD  
県立長崎シーボルト大学 教授  
Professor, Siebold University of Nagasaki



2000年6月13日(火)

## 発表者紹介

ケネス リチャード

Kenneth L. RICHARD

県立長崎シーボルト大学 教授

Professor, Siebold University of Nagasaki

- 1962年 米国 ワシントン州ワシントン大学東洋学部日本学科卒業  
1964年 米国 カリフォルニア州スタンフォード大学大学院日本研究科日本現代文学専攻修士課程修了  
1973年 米国 ワシントン州ワシントン大学院東洋研究科日本古典文学専攻博士課程の学位授与  
1971～1997年 トロント大学及びトロント大学大学院東アジア学部日本古典文学準教授  
1999年 県立長崎シーボルト大学国際情報学部国際交流学科教授

## 主な著書・論文・翻訳等

- 1977年 「アメリカ人の血と気質」集英社（日本語）（共著）  
1981年 「脱毛の秋—中原中也の詩」トロント大学ヨーク大学共同出版会（英語）  
「梅が香—与謝蕪村の俳句集」アリクアンド出版（英語）  
1988年 “砂漠のイルカ” 島田雅彦著 “Desert Dolphin”（英訳）  
1997年 「源氏物語」におけるママ・トラウマー “男装の母”としての光源氏（日本語・論文）

## 第一章 サダキチ・ハルトマン（一八六七—一九四四）と倉場富三郎（英

名 トーマス・アルバート・グラバー 一八七一—一九四五）の背景

憧憬とは、少し距離をおいてみると気づく記憶から造られる、組み立てられた真実の状態である。つまり遠く離れた生まれ故郷や過ぎ去った時代の記憶の破片を今の暮しの中に取り入れて、それらを重ねあわせてアイデンティティーを作り上げるときに、基となるものである。少なくとも私はそのように考えている。もっと簡単に言うと、「憧憬の旅」は精神に戻る旅である。ここでは、サダキチと富三郎という二人の人物がたどった生まれ故郷への憧憬の旅について述べたい。私の場合は留学生となったので、日本でその思い出を作ることにより生まれ故郷や記憶の組み立てを行なった。

したがって憧憬という概念は遺伝や血のつながりといった事実からではなく、我々それぞれが人生の中で得た真実から作り上げるものである。私もここで魅力的なセイレンの歌のように自分自身のことにも少し触れながら、長崎で生を受けた二人の男性について述べたいと思う。彼らが作り上げたものや、どのように人生を生きたかは、彼らが誰であるかという核心にふれるものである。二人が後世

に残した作品や功績は、その中に埋め込まれたアイデンティティーの遺伝的記号を切り離して語るには無理なほど、それぞれのアイデンティティーが関わりあっている。彼らは二人とも、日本人とヨーロッパ人との混血である。それぞれの親たちにとっては憧憬の旅の終着点で、二人は混血として生まれたのだ。そこに彼らと私との違いがある。二人は身近なところに外国というものを含んでいた。

二人とも長崎の外国人居留地で、数年違いで生まれている。どちらもヨーロッパ人の商人と日本女性の愛人との間に生まれたが、父親同士は知り合いではなかったようだ。サダキチの父カール・ヘルマン・オスカー・ハルトマン（一八四〇—一九二九）はプロイセン人で、富三郎の父トーマス・ブレーク・グラバー（一八三八—一九一一）はスコットランドのアバディーン出身であった。明治時代になる前の一八五五年から一八六五年は徳川幕府が調印した通商条約後で、自由貿易が許された時代であり、彼らは長崎で事業の道を切り開いた。景気が上向いていた上海で、長崎に活躍の場があるという情報を得たのであった。

それぞれの息子サダキチと富三郎は二人とも、実際には二つのアイデンティティーを持っているけれども、主として日本人の方を受け継いでいることを明らかにするように、生まれたときからルックスの良さが備わっていた。

ここでは混血である二人の男性が、どのように日本人のアイデンティティーの方を選ぶことになったかをたどっていきたいと思う。サダキチは幼い頃に日本を離れ二度と戻らなかったが、富三郎は長崎で活発に活動していた外国人社会の中で人生を過ごし、短い期間アメリカに留学した以外は海外へは行かなかった。

サダキチ・ハルトマン（一八六七—一九四四）は、カール・オスカー・ハルトマンと日本人の母おサダとの間に長崎で生まれ、ドイツからアメリカに渡り、第二次世界大戦終戦の直前に、フロリダに住む娘の一人を訪れているときに亡くなった。サダキチは晩年カリフォルニア州バニングで、自分で建てた小屋に住んでいたようだ。そこは、また別の娘ウイステリア・リントンが住むモロongo・インディアン族の居留地の一角であった<sup>1</sup>（写真1、2）。

晩年のサダキチは、アメリカにとつて敵国であるドイツと日本両国の血を引いていたために、FBIの諜報部員から監視されていた。しかしながら二つの世界



写真1

写真1：カリフォルニア州バニングでのサダキチ（1940年代初め）。〈カリフォルニア大学リヴァースайд校特殊文献図書館所蔵〉

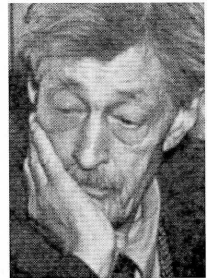


写真2

写真2：晩年のサダキチ（1940）〈カリフォルニア大学リヴァースайд校特殊文献図書館所蔵〉

大戦の合間は幸せな日々を送り、偉大でロマンティックでエキゾティックな東洋人としてもてはやされていた<sup>2</sup>（写真3、4）。

サダキチは十歳（一八七七）の頃までには父の国ドイツのハンブルグに

戻り、少年たちの兵学校にいたことが記録されている。同じ頃、富三郎も日本で撮った制服姿の写真があるが、どちらも典型的な両国の少年である（写真5、6）。新興勢力のドイツと現代化が進む日本は、軍や学校の「制服」を大切にすることが「母国愛」と同じ意味を持つと表現した。母国に対する憧れも憧憬の一つではあるが、サダキチの場合はそんな愛国主義的なものではなかった。

サダキチはまもなくドイツを離れたので、これらの思想からも遠のいた。父から勘当された彼はアメリカのフィラデルフィアに移住し、英語を身につける。作家、評論家、俳優としてのキャリアはここが大きな分岐点となった。



写真3



写真4



写真5

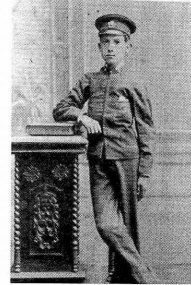


写真6

写真3：サダキチを諷刺した漫画。（カリフォルニア大学リヴァーサイド校特殊文献図書館所蔵）

写真4：魅力を持つサダキチの中年時代（カリフォルニア大学リヴァーサイド校特殊文献図書館所蔵）

写真5：ハンブルグで学校に通う13歳のサダキチ（1880）。（カリフォルニア大学リヴァーサイド校特殊文献図書館所蔵）

写真6：学習院上等小学校時代の富三郎（1884）。（長崎県立図書館所蔵）

一八八四年から約十年の間、サダキチは、フィラデルフィアの対岸ニュージャージー州キヤムデンに住む詩人ウォルト・ホイットマンを訪れている。一八八七年から一八八九年にかけてはボストンに住んで戯曲を書き、以後、家庭を持ち五人の子供に恵まれた。一八九六年から一九一六年はニューヨークに腰を落着け、アメリカにおける初期の偉大な写真家アルフレッド・ステイグリッツ（一八六四—一九四六）の写真に関する批評を執筆している。それから一九二〇年代から一九三〇年代はハリウッドやカリフォルニアの他の町に暮らし、ヴァンプのような生活を送った。同棲していたウイステリアの母親とも一九二二年頃にはすでに破局を迎えている。ハリウッドではサイレント映画の名作『バグダードの盗賊』（一九二四）に出演し、ダグラス・フェアバンクスと共演した。そしてジョン・バリモアをはじめハリウッドのバンディ通りに住む俳優たちと飲み仲間になった。サダキチはいつも会話の中心であり、必要とされている仲間であり、日独の混血だからといって仲間はズレにされることもなかった。

サダキチは日本の知識階級としての自分の虚構を楽しんだ。一生の間で、生まれてから数年しか日本で実際暮らした経験はないのだが、全部ではなくても日本人の特徴がよく出た顔かたちに誇りを持っていた。日本人の血を引いていること

は、モダニズムに対する芸術的な意見や論評の手助けとなったし、外見からただようエキゾティシズムは、アメリカの読者の興味を引き注目を集めた。サダキチは非常にハンサムな男性であった(写真7、8)。

倉場富三郎(一八七一—一九四五)は英名をトーマス・アルバート・グラバーと言い、サダキチより数年後に同じ長崎で生まれた

が、富三郎は特権的な家柄であり将来有望な道が引かれていて、サダキチとは正反対であった。富三郎の父トーマス・ブレーク・グラバーは、長崎に住む外国人の中では最も裕福な暮らしを送っていた。父グラバーは交換比率の違いを利用して、日本の金貨(小判)を上海に船で持ちこんで洋銀(ドル)に替え、それをまた日本でお金に替えることで三倍に増やし財をなしていた。

父グラバーは一八五九年、二十一歳のとき上海を経由して長崎にやって来た。一八六四年には長崎で最もりっぱで個性あふれる家を、湾が見渡せる岬の上に建



写真7

写真7：筆名にシドニー・アランを使っていた頃のサダキチ(1916)。シルヴィア・ビーチの撮影による。(カリフォルニア大学リヴァーサイド校特殊文献図書館所蔵)



写真8

写真8：サダキチ・ハルトマンの短い談話集「白菊」の表紙(ハーダ&ハーダ社 1971年版。オリジナル写真はJ.C.ストラウスにより1918年頃撮影)(カリフォルニア大学リヴァーサイド校特殊文献図書館所蔵)



ている。現存するその家は、長崎市指定の公園グラバー園の中に建つ。プッチーニの代表的なオペラ『蝶々夫人』の家として広く世界に知られているが、蝶々夫人は架空のヒロインで、モデルとなる女性がその家に住んでいたわけではなく、ましてやプッチーニがそこを訪れたこともなかった。父グラバーはそのオペラが有名になる前に東京で亡くなっている。長崎の観光コースになっているその家に、毎年多くの日本人観光客が押し寄せるのは、『蝶々夫人』への憧憬であろう。

富三郎は海外へ留学していた短い期間を除いて、父が東京の芝公園近くの別宅に移ったときも、父が建てた岬の上の邸宅を離れることはなかった(写真9、10)。富三郎は長崎の商業社会の中心人物として穏やかに仕事をこなし、礼儀正しい人物として通っていた。父トーマスの妻で、富三郎にとっては継母であるおツルが

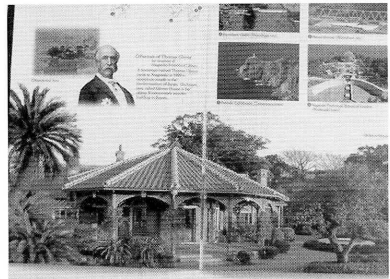


写真9



写真10

写真9：現在のグラバー邸。

写真10：グラバー邸から見た東山の手あたり（19世紀）。(長崎県立図書館所蔵)

亡くなったときに、富三郎はワカという娘と結婚した。ワカは英国商人と日本女性の間にできた娘で、以前より二人は父から婚約を勧められていた（写真11）。二人には子供がなく、一九三〇年代の陰うつな時代の最後の日までグラバー邸で平和な日々を送った。

富三郎の世界文化への重要な貢献はいずれ認められなければならない。彼は、手書きのイラストが入った日本最大の魚類事典の編集に力を注いだ。一九一二年から一九三六年の間に長崎在住の画家たちに描かせたもので、長崎付近の海に住む魚や海洋生物のみことなスケッチは八〇〇を越える。

富三郎が長崎の文化的生活に大きく貢献したものに、長崎に住む外国人と地元の人々が親睦を図る社交クラブ「内外倶楽部」の設立とその建物がある。建物は今も出島に残されている。出島は外国人居留地として一六三六年に長崎港内に作られた島で、約二〇〇年もの間オランダ商人との交易が許されていた。富三郎は、長崎の町の歴史保存や保護に取りかかっていた。二〇〇〇年の今年、日蘭交流四

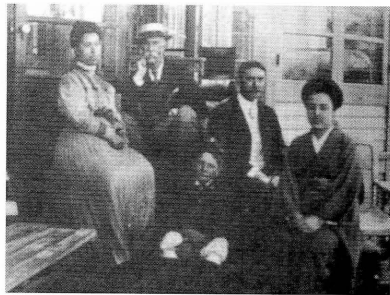


写真11

東京での住居である麻布富士見町のグラバー邸にて（1899-1900頃）。左より姉ハナ、父トーマス、ハナの長男、富三郎、ワカ。（長崎県立図書館所蔵）

に協力した。二人の父は軍艦の建造や武器弾薬の供給に関係し、息子たちはどちらも日本での西洋的な商売を拒絶した。

私もまた実は軍と関係がある。それについて少し触れておきたい。私の父はボーイング社に勤めていて、日本に大打撃を与えたB-29爆撃機の翼の組立て作業をしていた。長崎に原爆を投下した爆撃機も含まれているだろう。私はその仕事を拒絶したが、父を拒んだわけではない。同じようにサダキチは長崎から連れ出



写真12

写真12：シドニー・アランとしてのサダキチ（1918頃撮影）。  
（カリフォルニア大学リヴァーサイド校特殊文献図書館所蔵）

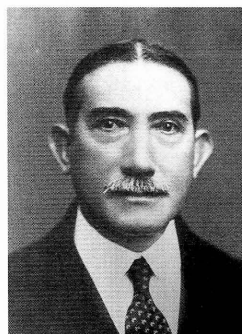


写真13

写真13：長崎社交界の中心人物であった頃の倉場富三郎。（長崎県立図書館所蔵）

百年という機を得て出島は部分的に再興されている。

サダキチと富三郎の成長した頃の写真がある（写真12、13）。私がこの二人を素晴らしいと思うのは、二人が異文化の中でアイデンティティーを築くことができたからであり、意識的な構図の上で、それぞれに日本生まれでありながら日本を憧憬することを基にして、日本とアメリカに意味のある文化的貢献をしたからである。政治も経済も、西洋の血が半分流れる二人の人生を崩壊させるの

されたが、長崎は決して彼から離れなかった。また富三郎は父の事業を拒絶したが、父を拒んだわけではなかった。サダキチと富三郎の組み立てられたアイデンティティーは、出生に基づいた憧憬である。二人とも遺伝的な二重性を放棄する決心をした。つまりサダキチの場合は、エキゾティシズムの輝かしい存在として生きるためであり、富三郎の場合は長崎市民と共に生きていくためであった。二人が文化的に成し遂げたことを私は評価したい。二十世紀を生きた彼らに降りかかった不当な差別を思うと、心が痛む。彼らの憧憬が続くことは許されなかった。それは今の時代でも起こりうることである。

## 第二章 サダキチ・ハルトマン（一八六七—一九四四）の文化的貢献

サダキチの父カール・オスカー・ハルトマンは、レーマン&ハルトマン商会の経営者の一人で、上海にあるマセソン&ジャーディン商会の事務所を経由して来日し、その英国系貿易会社の代理人として、自由貿易港である長崎で新しい取引の機会を調査するのが仕事であった。一八五五年から一八六七年は長崎が急激な発展を遂げていた頃で、カール・オスカー・ハルトマンにとっても同じであつ

た。

しかしサダキチには長崎についての記憶はほとんどなく、母おサダの思い出も、生涯持ち続けたたった一枚の写真以外にはなかっただろうと言われている（写真14）。おサダは目鼻だちが整った美しい女性であつたらしく、角ばったあごと細おもての顔だちは、長崎の友人によると、うりざね顔といつて長崎の典型的な顔だそうだ。年を取ってからのおサダキチは特に母親に似てきたようで、一九二〇年頃以降の写真にはほとんど、母のしっかりした顔だちとあごの特徴が出ている。子供の頃の写真にドイツ兵学校の制服姿があるが、柔和な丸顔で、よりドイツ人の輪郭に近い。若い頃はドイツ系統の顔かたちが目立っていたのに、本質を表す顔は人生の後半に現れるようだ。今日の長崎でも見られるように、目鼻だちが整っていて細おもてで角ばったあごの特徴がだんだん現れてきている。ここで注目したいのは、サダキチが自分の経歴や性格の中で最も誇りとしたことは、遺伝や顔かたち、様々なしぐさやふるまいに出る日本人らしさであったということだ。人々はそれをサダキチの中に見いだし、またサダキチもそれを伝えようとした。



写真14  
おサダ（カリフォルニア大学リ  
ヴァーサイド校特殊文献図書館所  
蔵）

私は、父オスカー・ハルトマンとサダキチとの關係に興味をそそられる。というのは、サダキチが父の経歴や事業を拒否したからである。サダキチが日本から最初に移り住んだ地ドイツのハンブルグでは、祖母を除いて親戚はみな彼に輕蔑した態度を取った。一方その頃、父オスカーは日本で武器彈藥を賣買していたが、結局のところそれもうまくいかず、さまざまな方法やいろんな場所に成功の道を求めていた。それらは、サダキチのように文学が好きで詩人肌の少年には、しっかりとした教育にはならなかっただろう。サダキチは、父オスカーが軍と密接な關係にあるとみなしていた。サダキチはハンブルグを出て兵学校に送られ、後に放校処分を受けたらしい。その理由は十分想像できる。兵学校時代の写真は制服を着た悲しげなドイツの少年で、数十年後「グレニツ・ヴィレッジのボヘミアンの王者」とアメリカ大陸中の噂になったサダキチとは似ても似つかない。人生は決まっているかのように、サダキチが日本に戻ることは二度となかったのだが、日本を離れる前から父がほとんど家にいず、日本人に銃を売っていたことをサダキチは知っていたにちがいない。

そうしてサダキチと兄タルーはドイツに送り返された。父は大阪で、徳川幕府に抵抗している和歌山藩とともに騒動に巻き込まれていた。徳川幕府の権力は失

墜して明治時代となり、明治政府は富国強兵や徴兵制度など新しい中央集権体制を敷くつもりであることも明らかにした。父オスカーが正しいことを間違った人々のためにしていたのは皮肉である。悪いことに、彼は明治政府の首脳部の中で新しく力を持ち始めた商人たちの間では適職を見つけることができなかった。しかし真相はちがうのだが。父オスカーは日本を去ることになった。サダキチと兄はすでにドイツにいたし、父も二度と日本に戻ることはなかったようだ<sup>4</sup>。

サダキチは兵学校からパリへと脱走する。父はサダキチを勘当し、フィラデルフィアに彼を追ひ払い、そこに住む親戚の世話に託すことにした。サダキチはその親戚をたより、無一文で一八八二年六月アメリカに到着している。そこで町の図書館や古本屋に通い、独学で読書を始める。

サダキチはすぐにアメリカに溶け込んだ。たとえ歴史が浅くても、少なくともアメリカは彼にとっては一つの統一された国であった。生まれた国日本とも父の国ドイツとも異なっていた。そこには精神力があり、労働観が存在していた。人が望めば何でも実現するような自由な感情があった。

サダキチの経歴に大きく影響を及ぼした出来事に、ウォルト・ホイットマンとの対話がある。その白髪の老人は、『草の葉』で知られる卓越した詩人であった。

一八八四年、サダキチはフィラデルフィアの対岸ニュージャージー州カムデンに住むホイットマンを初めて訪れている。サダキチは十七、十八歳であつただろう。以後彼を何度も訪れることになる。サダキチによる『ウォルト・ホイットマンとの対話』は、ホイットマンの死後一八九五年に出版された。当時も大きな噂になつたが、ホイットマンの遺言執行人は偉大な詩人に対するサダキチの辛らつな表現を快く思わず、出版を差し止めようとした。それにその内容は諷刺に満ち、当時活躍していた芸術界の著名な作家たちの欠点を容赦なく指摘していた。おそらくその中傷的な内容ゆえか、批評家たちは誰もが、サダキチが記録に残した会話は実際にはありえないとか、全部インチキだと言つてよい程誤りもはなはだしいと嘆いた。私はその短い作品を読んでみたのだが、当時の評価は悪かつたにせよ、実際はその時代の事実を正確に伝えようとしていたのではないかと思う。ホイットマンは無愛想な人物で、自分よりも劣つていると思う芸術界の作家たち、特に資本家階級の人々を激しく非難したことで知られている。サダキチの記述には真実がこもっているのだ。

ホイットマンの顔を見ても圧倒されるようなことはなかった。しかしその健康的な男らし



さはすぐに好きになった。私には、精神的に深められた現代アメリカ人のイメージのように見えた。つまりアメリカ人は真に労働者の民族であるから、理想の労働者の姿だ。とりわけ、自由に流れているような白髪やあごひげ、ブーシエのような、健康的でしつかりとした血色のよい顔に関心を持った。彼の顔立ちには、濃い眉毛と青みを帯びた灰色の目の間が広く離れている（冷静沈着な感じを与えている）。私の人相学的な観察によると、率直、大胆、傲慢な性格を表していて、とりわけ私の興味を引いた。<sup>5</sup>

サダキチがホイットマンに持った初めの頃の印象では、彼は素晴らしい人物で、見習うべきところがたくさんあると言っている。ホイットマンの遺伝子がサダキチの顔に移ったようだ。自分がこうありたいと願うことで、一体化を招いたのである。同じ評論の中で、後にサダキチは長崎の美しさについて述べている。長崎で生まれたことが自分の世界観にいかに関与しているかをホイットマンに印象づけるかのである。ホイットマンがサダキチに人生で何をしたいのかを尋ねる場面では、次のような会話が交わされている。

その頃の私は演劇に熱中していた。それで演劇に専念したいのだと自分の気持ち話し

た。シエイクスピア劇に出てくる道化について特に研究しようと考えていた（道化の役を演じるには背が少し高すぎるけれども…）。

ホイットマン（首を振りながら）「それはどうかな。我々には生まれ持った特徴や性格、つまりアメリカ人気質というものがたくさんある。君にはそれが身につかないだろう。支柱で支えることはできても、結局のところ、桃の木にバラを咲かせることはできないのだ」

私はほとんど記憶にはないけれども、日本のこと、それも長崎の美しい湾のことを話した。

ホイットマン「あー、美しいところなのだろうね」

帰るとき、彼は私に『つまるところ、ただ創造するだけではいけない』という詩のゲラ刷りを一冊くれ、父親のようにこう言った。「これを六回でも八回でも読みなさい。そうすればわかるだろうからな」<sup>6</sup>

この短いやりとりを通してサダキチが私たちに言いたかったのは、ホイットマ

ンのような偉大な詩人の忠告に、うわべではなくアメリカの真髓をくみ取り、その真髓を自由にイメージして、自分の個性を完成すべきだ、ということである。結局、ホイットマンは自分が最適な広告代理人であったように、出版社を通すというよりは、自宅から直接自分の出版物を販売していた。『つまるところ、ただ創造するだけではいけない』という詩のコピーをくれたことをサダキチが記事にしているのは、まさに適切である。そこには、ホイットマンが考えるアメリカの精神の真髓が含まれているからだ。サダキチへのメッセージは最初の三行にある。

つまるところ、ただ創造するだけではない。ただ建設するだけでもいけない。

おそらく、すでに建設されたものを、遠くから引き戻し、

均等で、限りなく、自由な我ら自身そのものを、それに与えることだ。<sup>7</sup>

演劇は控えるようにというホイットマンの忠告を無視して、サダキチは俳優になること、少なくとも演劇の世界に少しでも足を踏み入れることを決心した。それは、どうしても彼から離れない魅力であった。アメリカで初めて書いた戯曲

『キリスト』（一八九三）は、劇中に前向きの全裸の場面があり、他にも多くの点で現代性の先がけとなる劇であつた。

三幕からなる劇詩であるとサダキチが言う『キリスト』の中で、ジェシユア（キリストのこと）は、妹のマグダレンが住む小屋にいる。その時巡礼者ハンナが現れる。ハンナは幻想の中に送り込まれたような奇妙な感情を持ち始める。次に挙げるのが、特に論評で物議をかもした部分である。

（ハンナが入ってくる） 変な気持ちだわ。自分のことがわからない。

（一本のユリを折つてそのオシベを摘む）（中断）

二人（前のまま） 私たちの無邪気な夢は混乱して、満たされない欲望に染まっていた。私たちの愛は、心を蝕む想いに毒されている。創造の神秘は、私たちのエデンの園のような夢の中で誘惑となつてゐる。（彼らの声は小さくなり、涙が彼らの目から落ちる。あまりに激しくすすり泣くので、のどが震えている。ジェシユアはハンナの足元にひざまずき、悲痛な想いで頭を落とし、嘆く。ハンナは言いようのないほどの悲しみの表情でジェシユアを見つめる。彼女の全身が震え、太陽が雲の間から現れる。彼女の表情は美しくあどけない笑顔に変わり、神々しい美しさのその身体から身につけていたものがすべりおちる。

音楽：ハンナは急いで自分の裸体の背景をなしていた衣を整える。

ジェシユア 貴方の裸体は祈りである。（詩人エロサールにむかつて。エロサール登場）。

まもなくあなたは私の声を聞くでしょう。私の人生の使命はまさにこの時を始めることです。（聖母マリアが庭に入ってきて、ハンナと言葉を交わす）

エロサール 今、人々は奇跡だけを信じています。

ジェシユア それでは私がそれを起こして見せましょう。

エロサール あー、私がいつもあなたと共にいることができるなら。

ジェシユア あなたは自分自身を忘れることができて、あなたの芸術を忘れることはできないだろうに。

エロサール あー、私の最も大切な芸術よ。

ジェシユア 一日が喜び多いものを。

エロサール 来るべき時代が喜び多いものを。芸術は美しいものはすべて永久に伝えるのです。純粹な心で組み立てられた考えはどれも、生き生きとした空気を吸う権利があるのです。色彩、音楽、あるいは思考のインスピレーションは、ピラミッドが廃墟と化し、エホバの神殿が悠久の碧空にむかつて金色の丸屋根をもはや持ち上げなくなっても生き残っているでしょう。

ジェシユア おそらくそうでしょう。しかし何のために……？

エロサール 美しくするために、美しくするために！

裸体、照明と音楽、衣装は、アメリカ以外ではこれまでに使われてきた技術であり、スキャンダラスな要素は全くない。一九〇〇年パリ万博でのルイ・フューラーのダンスにも見られ、ヨーロッパの詩人や作家たちを大いに喜ばせた。五感を混合し、十九世紀フランスの象徴主義と同じようなシネステイシア（共感覚）の書き方は、サダキチの戯曲の核心にあるものだ。当時のアメリカは、フランス的な概念を受け入れるには単にまだ準備ができていなかったのだ。特にキリスト教の第一のイコン（聖像）を同じ舞台にあげる大胆さに驚かされたのだ。詩人のエロサールがジェシユアに言うように、キリストの言葉自体の基本的な機能は純粹に美的だ。実用的でないことに気づかなくてはいけないうまで言っている。その点である。まだまだ根本主義的なアメリカは、キリストの言葉を象徴的表現として受け取る準備ができていなかったのだ。サダキチは、照明や裸といった現代的な技術や、文学としての宗教的なテキストといった現代的な考えをアメリカの舞台に紹介したのであった。その結末はスキャンダルであり、逮捕であり、やつ

かいな裁判であつた。

しかしサダキチの天職というものは、ジャーナリストや評論家であり、人生を楽しむ自由奔放に生きるボヘミアンとしての人生であつた。ニューヨーク的な感覚、ヨーロッパ的な嗅覚を持ち、新しく作られた東洋的な偶像として、自由恋愛や社会主義、精神的解放を熱心に唱え、文学や美術の新しい形の芸術家としての人生であつた。

戯曲は失敗だったが、ニューヨークにいる間、サダキチは写真に関する多くの評論を残している。十九世紀最後の十年間と二十世紀最初の二十年間、つまり一八九〇年代から一九一〇年代に書かれた写真に関する評論は、最近になってサダキチが書いたとわかつたものもあり、写真評論の入門書として再刊されている。<sup>10</sup>これらの記事の中でサダキチが主として伝えたかつたのは、アメリカに芸術としての写真を紹介することであり、すぐれた評論家としての自分の地位を確立することであつた。アメリカではサダキチがその先駆者となつた。ここでは、サダキチの写真評論について詳しくは扱わないが、日本の絵画が写真の現代性を確立する手助けになつたという概念を、彼は何度も評論の中で使っている。

美術評論家としては、アメリカでの日本美術に関する最初の本『日本の美術』

(一九〇四)を執筆した。日本美術の影響について述べた章では、ヨーロッパでジャポニズムが大流行している理由を一般の読者に説明しようとしている。

ヨーロッパの芸術家たちは、人物や場所の巧みな設定、生き生きとした動き、表現力、形態や色彩への情熱、陰影を用いない人物描写のスケッチなどの点においては、日本人の芸術家たちと同等である。しかし彼らは、とるに足らないような日本の絵本にすら見ることのできる制限のない暗示性にたどり着くことは決してできなかった。この暗示性が現代芸術を征服したのだ。

タイミングもちょうどよかった。ヨーロッパではあまりに哲学的に描かれすぎていた。最も平凡なものから最も荘嚴なものまですべてが収集され、目録に載り、論評され、内容の乏しい知識をあちこちかき集めるために集められてきた。ヨーロッパ美術界にたまっていた埃やクモの巣を取り払う必要に迫られていたのだ。その知識のかたまりを浄化し、再編し、発展させることで、新しい生命を吹き込む必要があった。それを成し遂げるには日本美術をおいて何があるだろうか？ その影響は至るところに感じられる。たとえばそれは、アンデルセン、ツルゲーネフ、ヴェルガ、フランスやスカンディナヴィアの現代作家たちが得意とする短編小説を生み出した。実際に語る以上のものを暗示する簡潔な表現



に向かう傾向となった。少し変化をつけながら表現を繰り返す方法は、ポーの詩やフランス象徴主義者の作品にたどることができる。特にモーリス・メーテルリンクの作品には、中世ギリシャと日本美術を連想させる一風変わった組み合わせが見られる。<sup>11</sup>

サダキチはこの時代に他にもたくさんの本を書いた。それらの著書によりアメリカの絵画や彫刻に対する評価が確かなものとなった。著書には『アメリカ美術史』（一九〇三）、『芸術にみるシェイクスピア』（一九〇二）、『絵画における構図』（一九〇九）、『ホイスラー研究』（一九一〇）、『風景画及び人物画の構図』（一九一〇）、『現代アメリカ彫刻』（一九一八）などがある。

サダキチはハリウッドで映画の脚本を書いたこともある。サイレント映画の名作『バグダードの盗賊』（一九二四）ではダグラス・フェアバンクスと共演し、サダキチは魔法使いの役を演じた。その映画には他にも二人のアジア人が出演している。一人はモンゴルの王女を演じたアンナ・メイ・ウォン（一九〇五—一九六一）で、非常に美しい中国系アメリカ人であり、ハリウッドの他の映画にも多数出演している。もう一人は上山草人（かみやまそうじん）（一八九一—一九五四）で、アンナ・メイ・ウォンの兄の役であるモンゴルの王子を演じた。上山は後に、黒澤明監督の

『七人の侍』（一九五四 東宝）にも出演しており、三船敏郎と共演している。サダキチは映画に出演したアジア人の草わけ的存在の一人であった。

一九三〇年代、サダキチは「バンディ・ドライブ・ボーイズ」として知られるハリウッドの俳優仲間たちと親交があった。その中には、ジョン・バリモア、ジーン・ファウラー、W・C・フィールド、ジョン・デッカーなどがいる。ジーン・ファウラーが書いた『最後の集いのノート』（一九五四）の回想によると、バンディ通りはジョン・デッカーのスタジオと自宅があったところで、今やOJシンプソンのうわさで有名となったカリフォルニア州ブレントウッドの中にある。おそらく隣人達はいつもイライラしていただろう。ジョン・デッカーはハリウッドの俳優仲間を持つ芸術家であった。「バンディ・ドライブ・ボーイズ」は、無作法だが都会風で、ウィットに富み、不道德で、辛らつ、誠実だが大胆、ハードな生き方の（ハードな飲み方の、とも言える）グループであり、サダキチは彼らをとてもしさせていた。この頃、サダキチは『美的真実』という長編に取り組んでいたが、出版されていない。サダキチは喘息もちで大酒飲みであり、このバンディ通りのパーティーでしばしば道化を演じていた。<sup>12</sup>

第二次世界大戦中、サダキチは娘の一人ウィステリア・リントンの家の近くに

檣板の小屋を建て、変人のような生活を送っていた。その小屋をサダキチは「キヤットクロー・サイディング」と呼んでいた。彼は一九二三年にカリフォルニア州バニングにあるその場所に移ってきたのだが、そこはモロンゴ・インディアン族の居留地の一角であった。彼は一九四四年、七〇歳後半で死ぬ少し前までそこで過ごしていた。彼が亡くなったのは、最初の妻との間にできた娘ドロシア・ジリランドをフロリダ州セント・ピーターズバーグに訪ねていたときであった。

サダキチについて日本語で出版された本は、『叛逆の芸術家―世界のボヘミアン―サダキチの生涯』（太田三郎著 一九七二）のみである。また現在、越智道雄氏（明治大学教授）が三省堂『ぶっくれっと』に「サダキチ・ハートマン伝」を連載中である。美術史や評論についてのサダキチの著書はほとんど出版されておらず、忘れられた存在であるが、アメリカ芸術や戯曲、写真、絵画、彫刻に対するアイデンティティを創り出そうと努力した芸術家たちへの影響は今もって驚くべきものがある。カリフォルニアの田舎に追いやられてからも、一九四四年に死ぬまでアメリカの文化的エリートたちと交流を続けていた。彼の手紙の中には、詩や美術に関してエズラ・パウンドから来たものも八通あり、それらもカリフォルニア大学リヴァーサイド校の特殊文献図書館に保管されている。

### 第三章 倉場(グラバー)富三郎(一八七一—一九四五)の文化的貢献

日本人の母親と日本国民ではない父親との間にできた混血児たちが、合法的に父親の姓を名乗ったり財産を受け継いだりすることは望みの持てない時代であった。そんな中で、日本人のアイデンティティーの部分主張することについては、倉場富三郎はサダキチよりもはるかに幸運であった。富三郎の父トーマス・グラバーは日本女性ツルが正式な妻となるよう取り計らった。ツルは晩年東京でグラバーと暮らしていたが、「グラバー」の日本語読みに近い「倉場」姓を名乗るために新しい戸籍謄本の手続きが長崎で行われた。結婚はしていてもグラバー姓の戸籍謄本がないので、ツルは富三郎がすでに入っていた倉場姓の籍に同じく入った。富三郎は二十三歳で、正式に倉場姓を名乗っていた。ツルは実際には継母であったが、便宜上、実母として登記された。

このようないきさつで富三郎は、少なくとも一九三〇年代の軍国主義の陰うつな時代に自分が生まれた国と自分の血が流れるスコットランドが戦うまでは、長崎の外国人社会の中で尊敬され、多忙な日々を送り、長崎実業界の名門のままであった。

一八九九年、富三郎は「内外倶楽部」の設立に加わった。それは長崎の外国人社会と地元の人々が親睦を図るための初の社交クラブであった。また、外人居留地以外では日本国民でないものは土地の売買や貸借が許されていなかったが、一八九九年にその境界線が廃止された。十六世紀以来、日本の中でも最初にヨーロッパやアジアの人々が暮らし、商売を営んできた歴史上重要な町長崎にとって、真の国際化時代の始まりとなった。

富三郎と、父の友人で雇い主でもあるフレデリック・リンガーは、内外倶楽部の拠点となる新しい建物の建設にも出資し、その建物は一九〇四年に完成した。日清戦争後、長崎港は再び栄え、忙しい日々が続く中で、経済力のある男性会員のみというそのクラブは、外国から商用で訪れる人たちに長崎を印象づける最適な顔となった。クラブは日露戦争（一九〇四—一九〇五）の苦しい時代も存続し、乃木希典大将のもと日本が勝利したことで、アナトリー・ステッセル將軍の指揮により一四〇〇人のロシア軍捕虜が長崎を経由してウラジオストツクに帰国するときも立ち会った。

プッチーニのオペラ『蝶々夫人』は一九〇四年にミラノのスカラ座で初演されたが、後に内外倶楽部で年一回行われる仮装パーティーでは、世話役をしていた

富三郎がピンカートンに扮したこともあったという。長崎を有名にしたそのオペラのピンカートンをまねるときでさえ、富三郎は完璧な英国紳士の立場をわきまえていた。事業も外交も活況を呈していたこの時代は、混血でも受け入れられる恵まれた頃であつた。

内外倶楽部は、温和な性格の富三郎がうまくまとめ一九四〇年代まで続いた。クラブの建物は木造二階建て、アジアでよく見られるコロニアル風で、至る所に富三郎の好みや西洋での経験が生かされていた。各部屋に置かれたマントルピース、二階の広々としたベランダ、広い階段と磨きぬかれた手すり、大理石を使った化粧室など、明治様式の印象を完べきに与えている。会議室や応接室、図書室、ヨーロッパ製のテーブルと椅子を配した食堂、ビリヤード室、バーなども富三郎の設計であつた（写真15、16）。

同じ頃、富三郎は日本人社会とも幅広く交際を続け、三菱の代々の社長である岩崎家とも父以来の親しい付き合いが続いていた。しかし良き時代は終ろうとしていた。一九三六年に行なわれたイギリス王ジョージ六世の戴冠を記念する華やかなパーティーが最後となつた。そのパーティーにはワカも出席し、富三郎はいつものように紳士的な態度で接待役をこなした（写真17）。南山手の丘に立つ邸



写真15

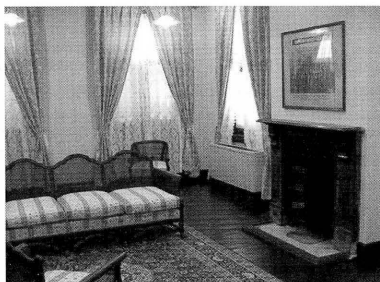


写真16



写真17

写真15：内外倶楽部にて、筆者。  
 写真16：内外倶楽部の2階、ミーティング・ルーム。  
 写真17：ジョージ6世戴冠式を祝うレセプション  
 での富三郎とワカ。オルト邸にて(1936年5月)。  
 (長崎県立図書館所蔵)

宅から、あまり目立たない丘のふもとの古い洋館  
 九番館へ引越すまではすべてが順調であった。  
 丘の上のその邸宅は一八六四年に父が建てたもの  
 で、個性あふれる堂々とした家であったが、一九  
 三九年、三菱造船所よりそれを提供するよう求め  
 られた。父グラバーは若くして、邸宅の下の方に  
 ロシア船の修船場を作る事業を行っていた。それ  
 は修理だけでなく造船場にも容易に変えられるよ

うになっていた。彼は三菱の重役の  
 一人であったので、後にそこに日本  
 最大の軍艦建造場を作ることになっ  
 たのだと思われる。三菱造船所は父  
 グラバーの助けて長崎での事業の足  
 がかりを得たのに、今やその三菱が  
 富三郎に敵意を示したのである。と  
 いうのは、その造船場は丘の上の邸

宅から見下ろせる場所にあり、絶対機密の時代にそこに住みつづけるのは許されることではなかった。そして富三郎は、事実上自宅監禁のような生活となった。そうしている間にも、父グラバーが初めて本格的な造船場を造った敷地で、二十世紀の転換期に日本海軍は世界最大の戦艦「武蔵」の建造を進めていた。

ワカは一九四三年に亡くなるまで、愛国婦人会の会員として出征兵士の見送りなども行なっていた（写真18）。そして富三郎は、原爆が落ちた十七日後、九番館の二階の寝室で首を吊っているのが見つかった。原爆は浦上地区を襲い、天主堂や半径5km内の建物をすべて破壊した。彼の死体は原爆投下直後のこともあって、瓦礫の中埋葬されないままの何千という他の遺体と一緒にされた。

富三郎が残した最も偉大な功績は、日本の魚類や海洋生物についてまとめた『日本西部及南部魚類図譜』（一九三六）である。これは、丘の上のグラバー邸や、出島に残る内外倶楽部の建物と同様に生き延び、今日、それらはすべて再興されている。それは一世紀を越えてグラバー家と友人のようにつきあってきた長崎人



写真18

愛国婦人会の会員であったワカ（右端）。  
（長崎県立図書館所蔵）



たちの間に、富三郎への愛情が続いているおかげである。<sup>13</sup>

## 注

1 ウィステリア・リントンは、父サダキチの原稿、写真、個人的な資料などすべてをカリフォルニア大学リヴァーサイド校特殊文献図書館に寄付した。サダキチに関する写真はすべて、同校の好意により掲載させていただいた。写真は、晩年、バニングで小屋に住んでいたときのものである。円熟期に撮った写真は日本人らしさがよく出ていたが、この頃のサダキチは、明らかに日本よりヨーロッパの血を多く受け継いでいるようにみえる。混血の民族性は、このように子供時代と老年に特徴が出るが、自ら選んだアイデンティティーは、憧憬の旅をしているときに強く現れる。

2 サダキチを諷刺した漫画は、ハリウッド時代の友人の一人ジョン・デッカーが描いたものである。組み立てられた日本人らしさをゆえ屈折したボヘミアンの面が強く影響しているこの時代の彼をよく描いている。

3 私も子供の頃、セーラー服と半ズボン姿の写真を撮られたことを覚えている。日本の中学校で今も普及している学校の制服は、これをモデルにしている。

4 サダキチは知らなかったと思うが、実際の話はこうである。

長崎のレーマンⅡハルトマン商会は、プロイセン陸軍が使用しているライフル銃であるツェントナール銃の輸入代理店となった。その銃はプロイセン陸軍のためにジョアン・ニコラス・フォン・ドライゼ（一七八七—一八六七）が開発したものである。レーマンⅡハルトマン商会は、その銃の威力

を示せる人物を捜すことで、和歌山藩から注文を取りつけていた。それでその銃の製造工場に派遣されたことのあるドイツ人と接触を持った。一八六七年にその人物ケッペン（一八三三—一九〇七）にこの仕事についての手紙を書き、日本に来て和歌山藩にその銃の使い方を教えるという契約を彼と交わした。一八六八年末、ケッペンはそのライフル銃三〇〇挺と弾薬を持ってドイツを出発し、一八六九年六月二十九日に神戸に到着したが、十一月になってから和歌山に入った。というのは、一八六七年に明治維新が起こり、政治的状況が一変し、明治政府が徴兵制度を導入しようとしていたからである。レーマンⅡハルトマン商会とケッペンは、新政府のもと新興勢力となった和歌山藩と契約を交わした。

一八七〇年から七一年に独仏戦争が勃発し、プロイセン軍がフランス軍に快勝した。プロイセン軍の強さが日本人の関心を呼んだが、一八七一年、日本は中央集権体制による廃藩置県により新しく府県制が敷かれ、軍事力を特に強化していた和歌山藩も廃藩となった。これにより、レーマンⅡハルトマン商会が和歌山藩の軍事訓練に独占的に関わっていたのも終りとなった。ケッペンは一時的にドイツに戻り、また和歌山に戻ってきたときには、彼が交わした契約はキャンセルされていた。彼は、残りの契約金を得てドイツに帰らざるをえなかった。

レーマンⅡハルトマン商会と、日本でそれ程必要とされたケッペンとプロイセン式ライフル銃との関係には、興味深いものがある。おそらく、一八六九年にケッペンが大阪に着いた後レーマンとハルトマン二人ともが長崎の記録から消えた理由もそこにあるのであろう。それまでにレーマンⅡハルトマン商会は事務所を大阪か神戸に移したので、サダキチはハンブルグに送り返された。ケッペンが和歌山藩との契約をキャンセルされたと知ったとき、レーマンもハルトマンも日本にとどまっても有益

ではないと気づいた。ケッペンが帰国したのは明らかだが、他の記録からハルトマンも生まれた国ドイツに戻ったようだ。おそらく自分の兄に預けている二人の息子サダキチとタルーがいるハンブルグに戻ったのだろう。一八六九年一月以降のレーマンの消息はわからない。(これらは長崎県立図書館の本馬氏の好意により、公文書資料から荒木康彦氏が書いた記事を参考に使っていた)

5 ジョージ・ノックス編『ホイットマンとハルトマンの論争』 P 67

6 同 P 68

7 第一連の残りの部分である。

拒絶し破壊するよりも、むしろ受け入れ、溶かし、蘇らせ、指揮するばかりか服従もし、先導するよりもあとにつづく、これらのことも我々が「新しい世界」の教訓であり、所詮「新しい世界」などいともささやかなものでしかなく、「古い昔の世界」こそ実に、実に偉大であり。

長く長く長く草は茂りきたり、

長く長く雨は降りつづけ、

長く地球は回転を止めず。

(酒本雅之訳『草の葉』中 岩波文庫 P 68～69より転載)

一八七六年のフィラデルフィア百年祭によせた「博覧会の歌」より。「つまるところ創造するだけではないけない」という題で一八七一年に出版された。『草の葉と自伝』 P 441—50

8 アメリカでの若い頃のサダキチについては、太田三郎著『叛逆の芸術家―世界のボヘミアン―サダキチの生涯』を参考にさせていただいた。

9 『仏陀、孔子、キリスト―三人の預言者の戯曲』P 148―49

10 『サダキチ・ハルトマン―クリティカル・モダニスト』を参照。

11 『日本の美術』 P 160―61

12 ここに抜粋し掲載した情報のほとんどは、『カリフォルニア大学リヴァーサイド校の新着書及び収蔵書季刊報、UCRブックス』に掲載された記事（一九七三）による。それらはジョージ・ノックス教授により書かれたものだが、出版はされていない。

13 富三郎の内外倶楽部建設への援助やグラバー家の情報に関しては、多田茂治著『グラバー家の最期』を参考にさせていただいた。また富三郎が生きたために選んだ社会よりも自分のアイデンティティーにとって心地よい方の呼び名を選んだ、つまり両方を取ることができなかった富三郎について、英語で書かれた心を打つ概論であるブライアン・バークガフニ著『倉場富三郎の人生スケッチ―両方を取るができなかった男』を参照した。この人物の西洋的な一面は憧憬であった。人はこれを富三郎の生き方、つまり彼の物の見方や彼が建てた物、成し遂げたことに見ることができる。

## 参考文献

・荒木康彦『レーマンⅡハルトマン商会とカール・ケッペン』川口居留地研究会会報第十三号、一九八八年八月発行（長崎県立図書館所蔵）

・ 同 『レーマンⅡハルトマン商会と幻の「第二の維新」』「特集 開化大阪と外国人」より P 62—

67、書名及び発行日不明（長崎県立図書館所蔵）

・ 同 『撃針銃にみる維新期の紀州』P 3 朝日新聞、一九九七年十二月二十六日付

・ 太田三郎 『叛逆の芸術家—世界のボヘミアンⅡサダキチの生涯』東京美術、一九七二年

・ 越智道雄 『サダキチ・ハルトマン伝』三省堂ぶつくれつと、一九九八年

・ サダキチ・ハルトマン 『仏陀、孔子、キリスト—三人の預言者の戯曲』ハリー・ロートン、ジョージ・ノックス編、ニューヨーク・ヘルダー・アンド・ヘルダー、一九七一年

・ 同 『日本の美術』ニューヨーク・ホライズン・プレス、一九七一年

・ 同 『サダキチ・ハルトマン—クリティカル・モダニスト』ジェーン・カルフーン・ウィーヴァー編、バークレー・カリフォルニア大学プレス、一九九一年

・ ジョージ・ノックス編 『ホイットマンとハルトマンの論争』（『ウォルト・ホイットマンとの対話』及び他の評論を含む）ベルン・ピーター・ラング、一九七六年

・ 同 『ウイステリア・ハルトマン・リントンの収蔵品とハルトマン研究の経緯』カリフォルニア大学リヴァーサイド校図書館の新着書及び収蔵書季刊報——一号、一九七三年六月

・ ウォルト・ホイットマン 『詩集草の葉と自伝』フィラデルフィア・デヴィット・マッケイ、一九〇〇年

・ ウォルト・ホイットマン作・酒本雅之訳 『草の葉』中、岩波文庫、一九九八年

・ 多田茂治 『グラバー家の最期』福岡・葦書房、一九九一年

・ ブライアン・バークガフニ 『倉場富三郎の人生スケッチ——両方を取ることができなかった男』P 51—

73、クロスロード長崎歴史文化新聞三号、一九九五年夏号

・鶴田欣也『越境者が読んだ近代日本文学』東京・新曜社、一九九九年

(編集協力 小原ちさと)

\*\*\*発表を終えて\*\*\*

発表を終えて感想を申し上げます。まずわざわざ京都までお招きをいただき誠にありがとうございます。およそ100人の方々にご清聴していただいております。話を通じましたかどうか皆様のご期待にそえたかどうか心配ですが、今度の話の目的は長期間的研究の序章として長崎出身の混血児二人の文化貢献を取り上げながら、人間として夫々違う性格を持ってアイデンティティーを構成するには重ねて何層もあり、本当に20世紀の日本と異文化交流の悪と善のからくりと同じくサダキチ・ハルトマンと倉場富三郎にも悪と善の時代があったということです。二人とも内部と外部、建前と本音、外国人と邦人、なんらかの滑りやすいスライディング・スケール (sliding scale) を弄りながら、道化役を演じたり、紳士役も演じたりする。自分の外と中のアイデンティティーがずれて来ると化ける、調和するとやさしくなる。本当に河合隼雄先生がサミット記念国際シンポ「21世紀の展望」で仰った通り“アイデンティティーはプロセスであり、完了形で語れるものではない”(朝日新聞 6月28日)。文化と文化があって“切磋琢磨が生じる”とも言われました。動作に“…合う”という接尾語が付くという意味でしょう。取り上げた二人の混血児の場合まだ時代が早すぎたし、憧れと事実で調和的に生きる時代ではなかったのです。二人の話はまったく20世紀の教訓にもなる所があるのではないのでしょうか。

今度の話の内容は圧倒的にサダキチ・ハルトマンに焦点を置きました。将来はもっと Thomas Glover (グラバー邸のグラバー氏) の息子富三郎の貢献を取り上げたいと考えています。今回足りないとお思になった方がいらっしたでしょう。申し訳ないです。タイミングとして1時間以上の話は無理だったようですので省きました。





日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊びー拳を中心にー」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係 の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都ーケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトローブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 -『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリーア美術館 ー米国の日本美術コレクションの一例としてー」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践ー有島武郎の場合ー」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 ー旧身分文化との関連を中心としてー」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 ー科举制度をめぐるー」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り ー 平安朝文学の特質ー」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」



67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Francois MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「雷神思想の源流と展開－日・中比較文化考－」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧⑩	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨⑤	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 — 解釈学の未来を見ながら」
⑨⑥	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 — なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学ー近代からの再生ー」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何かー21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人ー外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼までー狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員 教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

118	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
120	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニング コンサルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン ノエル ロベール (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文－死語の将来－」
123	11.11.16 (1999)	ヴラディスラフ ニカノロヴィッチ グレグリヤード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブル ク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14 (1999)	楊 曉捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景－絵巻『長谷雄草紙』を読む－」

回	年月日	発 表 者 ・ テ ー マ
⑫25	12. 1. 11 (2000)	エミリア ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜—西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究—」
126	12. 2. 8 (2000)	李 応寿 (韓国・世宗大学校副教授・日文研客員助教授) LEE Eung Soo 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3. 14 (2000)	アンナ マリア トレーンハルト (ドイツ・デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) Anna Maria THRÄNHARDT 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫28	12. 4. 11 (2000)	ベッカ コルホネン (フィンランド・ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) Pekka KORHONEN 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9 (2000)	金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) KIM Jeong-Rye 「五・七・五、日本と韓国」
⑫30	12. 6. 13 (2000)	ケネス リチャード (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) Kenneth L. RICHARD 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン(1867—1944)と倉場富三郎(1871—1945)」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

\*\*\*\*\*

発行日 2000年12月22日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048  
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp/>  
問合せ 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

© 2000 国際日本文化研究センター





■ 日時

平成12年 6 月13日(火)

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

第二〇回 出島―長崎―日本―世界―憧憬の旅

国隆  
日本文化研究所